



奈良県の方言

東京奈良県人会

(平城遷都 1300 年記念)

目次

はしがき	1	動詞の活用	38
語彙	2	「が」格の表わし方	40
古典に出てくる言葉	17	方向、場所の表わし方	40
舌もつれの例	21	接続表現	41
地域比べ		反語の表現	42
音変化	23	感動表現	42
文末の訴えことば	27	語詞、用語	43
間投詞	30	会話例	
敬卑待遇法	31	下北山村	45
アスペクト	33	宇陀市	47
断定の助動詞	34	十津川村	52
打消しの助動詞	35	五条市	56
推量の言い方	37	大和郡山市	60

はしがき

平城遷都 1300 年を記念して奈良県の言葉を集めてみました。

中には小さい頃に年配の人たちから聞かされた言葉を懐かしく思い出すこともあるかと思います。また、語彙に限らず音変化、文末の訴えことば、間投詞、敬語などいずれをとっても地域、地域で異なることもあり、別の地域で育った人にとっては目新しい発見もあることと思います。

本書の「語彙」は素人編集委員の手で収集したものです。千葉政清氏遺稿「十津川方言集」から収録した言葉もありますが、同書のすべてを収録したものではありません。従って、奈良県の方言語彙のごく一部をご案内するものとなります。

文法的分析や会話例を紹介する「地域比べ」は奈良県教育委員会の「奈良県方言収集緊急調査」による「奈良県の方言」から抜粋したものです。

千三百年前の昔、八重桜匂う朱雀の大通りで、国中（くんなか）の邑で、東山中（ひがしさんちゅう）の道で、また奥（おく）の里で、我々の先祖はどのような言葉遣いで話を交わしていたのでしょうか。往にし辺に思いを馳せながら、言葉の多様性をお楽しみください。

東京奈良県人会役員一同

語彙

奈良県の方言と一口に言っても、近畿一般に広く使われている言葉から、奈良県の中の狭い地域で使われているものまで様々です。また、中には「うたて」「ずつない」「またい」「よさり」のように、古典文学にも出てくる言葉が標準語の座を明け渡したのもも多くあります。ここに収録されているのは、そういう奈良県の方言のごく一部です。他に“これは”というものがあれば、収録ご提案をお待ちします。ホームページ上の掲示に反映させたいと思います。

方言	意味	例
～から	～以上	えらい重いな、10キロからあるで
～け	～か	いこけ（＝行こうか）
～したいす	～している	言うたいす（＝言っている）
～しやる	～する	えらいよおすしやる（「よおすする」の項参照）
～できかん	～以上ある	こら10キロできかんで
～はか、～はっちゃ	～しか、～以外	それはかない、それはっちゃない
あいさに	たまに、時々	あいさにわしとこへも来てや

あいやこ	共同、共有	あいやこで使いまひよ
あおつ	あおぐ	火をあおつ
あくもんじゃな一	駄目だ	
あけのひ	明くる日、翌日	
あっちゃべら	あちら側	
あとえする	二の足をふむ	
あとさし	二人が足をつき合わせて寝ること	炬燵をあとさしにして寝る
あとにや一	先日は	あとにや一 お一きに (先日は有難う)
あも	餅	あもかもちか (五十歩百歩の意味)
あやかす	まぜかえず、世話をかける	えらいあやかしまして (帰りがけの挨拶)
あんじょう	うまく	あんじょうしといてや
あんびもち	あん入りの餅	
いお	魚	
いけず	いじわる	いけずせんといて
いこる (熾る)	炭火などに勢いがつくこと	
いじりつむ	うづくまる	

いっち	一番	
いちびる	調子に乗ってふざける	いちびるな
いぬ	帰る	もういぬわ
いのく	動く	この車、いのかして
いまさきー	ついさっき	いまさきー 行きよーつら
いらう	さわる	この機械いらわんといてや
いらう	ちょっかいをかける	あの人はいろうたらうるさいで
いらち	いらいらしやすい	あの人はいらいいらちやな
うたて	情け無い	うたてえなあ
うわか	表面	
うんすけ	うんと、沢山	
ええし	金持ちの家	あれはええしの子やで
えら(接頭語)	いうまでもなく十分に	えら知り。えら出来(でけ)や。そんなもんえら行けや
おかいさん	粥	
おが	カメムシ	
おさぎ	兎	

おしける	教える（十津川村）	
おじゅっさん	お住職（県北部）	
おたびら	あぐら	
おっばん	仏に供える御飯	
おとろしい	面倒だ	こんなんおとろしいな
おとんぼ	末っ子	あの子、おとんぼやな
おひーさん	太陽	
おびやご	赤子	
かいはつ	十分でないこと	このぐらいの酒ではちょっとかいはつやな
がいろくだま	おたまじゃくし	
かかりがまい	関係	
かく	持ち上げる、支える	ちょっとこれ一緒にかいてんか
かざ	臭気、杳気	
かたげる	かつぐ、肩になう	
がっそう	頭の毛がバサバサしている様子。もとは総髪 <small>（みづかみ）</small> の切下げ髪「元僧」から。由比正雪の髪もそうだった。	
かんこおり	氷	

がんじ	丸薬	
かんしょやみ	大変に潔癖な人	
きける	弱る、疲れる	今日の仕事はきけたな
きょうとい	あきれかえるような、あさましい	
くいたち	食べた直後	
ぐいち	ちぐはぐ	まだこの辺がぐいちになつとるわ
くえる (壊える)	崩れる	田んぼの畦がくえた
くき	菜漬	
くつな	蛇	
くみる	朽ちる、発酵する	
ぐるめ	合算して	風袋ぐるめで何キロや？
けつわり	断念、中止 (県北部)	けつわりせんと最後まで頑張りなはれ
けなりい、けなない	羨ましい	
けんずい (間炊)	間食 (昼食と夕食の間)	
げんろく	膝がしら	
= ひざぼし (県北部)、ひざぼん (都祁村)、ひざかぶ (上北山村)、へざかぶ (十津川村)		

こーと	地味	お年にはちょっとこーとな柄と違いますか
ごうなれ	強情	
こくま	松の落葉	
こそばい	くすぐったい	そんな誉めてもうたらこそばいな
こっとな	私の家	
こまる	はさまる (特に歯の間に)	
ごりがん	強情者	
ごんた	やんちゃぼうず	
さいら	秋刀魚 (十津川村西川)	(奈良県の他の地域でも使われていた)
さいれ	秋刀魚 (十津川村折立)	
さかめいる	酒に酔ってくだをまくこと	
さくい	もろい	
ささりかんじょう	必要もないこと	ささりかんじょうのなあーことをするな
さぶいぼ	寒疣	
さんきら (山帰来)	サルトリイバラ	

しがむ	何回も嘔む	
しつべけりゃあー	出来るならば	しつべけりゃあー してみー
ししなげ	汚い溝、その水	
じじぼけ	髪が火に焦げること	
しづみ	釣糸の錘	
しなこい	やわらかい	
しぶちん	吝嗇家	
しりこぶた、しりこぶた	臀部	
じょうほう	両方	
しるい	ぬかるんでいる	雨降ったさかい道しるいな
すいっちゃん	馬追	十津川村滝川では「すうちょん」
すいな	いきな、転じて一風変わった	すいな服着てはるわ
すえかえし	お歳暮（北葛城あたり）	
ずくずく	びしょびしょ	着てるものがずくずくになった
すこい、すっこい	ずるい	

ずつない (術無い)	つらい、苦しい	
すまんだ、すま、すまくた	隅っこ	
せえだい	精一杯	せえだい食べなはれ
せきだ	雪駄	
せちがいまくる	きびしく叱る	
せんぐり、せんおくり	順繰り	
せんど	何度も	せんど言うてんのに
そうですの	そうなんですか	
ぞうよう	費用	
ただいも	里芋、泥芋 (吉野あたり)	
たなもと	流し台	
たらずあえ	足らない分	「たらずまい」ともいう
たばる	神仏への供物を下げる	
たまひ	人魂	
だんない	差支えない、かまわない	

ちゃがいこぎ	茶粥の実だけをすくったもの	
ちょける	おどける	
ちんちろ、ちんちり、	松かさ	
つむ	込み合う	この道、えらいつむな
つろく	釣り合い	いうこととすることがつろくせえへんがな
てしよ	皿	
てのごい	手拭	
でらい	おおきい	あいつでらい嘘ついとるで
てらてら	朝焼け	てらてらは雨が降る
てれこ	反対、あべこべ	おまはんの着てるもの、そらてれこやがな
てんちゃん	お手玉	
でんぼ	おでき、腫物	
とうしみ	燈芯	
といれる	取り込む	洗濯もん、といれてや
とうろくまめ	隠元豆	

とこぎり	徹底的に	
とごる	沈殿する	
どたま	頭の悪称	
どっちいせ、どっちやみち	何れにしても	
どろこす	あふれ出る	
どんな	頭の鈍い、不器用な	どんなことですんまへん
どんならん	どうしようもない	
なおす	片付ける、仕舞う	出したもんは、なおしときや
なかなか	どういたしまして（県北部）	
なきみそ	泣き虫、よく泣く人	あいつはなきみそやな
なめくぢら	なめくじ	
なんど、なんぞ	おやつ、間食	お母ちゃんなんどおくれんか
にぎやかし、にんにやかし	賑やかにするために加えるもの	
にすい	馬鹿な	
ぬくい	あたたかい	だいぶぬくなりましたなあ

		あの人の懐（ふところ）ぬくそおやな
ねぶち	値打ち、価	
ねまる	筋肉が痛い	足がねまる
ねそ	おもくるしく気の利かない人	ねその大ごと
はしかい	かゆい	このシャツはしこおてかなんわ
はしかい	すばしこい	えらいはしかい子やな
はじし	歯茎（倭名類聚鈔で波之全と記す）	はじしが腫れてきた
はしりごく	駆けっこ	
ぱっち	股引	
はっぼする	さえぎる	
はんがい	むかつく	あいつ、はんがいわ
はんちゃ	半纏	
はんつ	半端	
はんび、はぶ、はび	蝮（反鼻）	
はんみち	半里（十八丁）	

ひずかし	間食	
ひだるい	腹が減って力が出ない	
ひちてんごう	いらぬこと	
ひねる	古くなる、年をとる、ませる	
ふーする	服をきる	はよお、ふーせんかい
へたる	倒れる	
べった	最後(びり)	徒競走でべったになった
へんじょおこんごお	ごたごたいうこと	ごたごたとへんじょおこんごおばっかし言いおって
へんねし	やきもち、嫉妬	あいつへんねし起しとんねん
ほーべた	頬	
ほうせき	おやつ	
ほかす	捨てる	これもうほかしといて
ほしい	惜しい	
ほっこりせん	思わしくない	
ほたえる	ふざける	(動きのある情景)

ぼちぼち	そろそろ	ぼちぼち行こか
ぼとぼと	びしょびしょ	
ほどらい	適度、よい加減	ほどらいでええやないか
ぼろくち	うまい儲け口	
ほん	ほんとうに	ほん少うしですけど
ほんだち	それでも	ほんだち あほくさーもの
ほんだら	それでも (そしたら)	ほんだら行こか
ぼんばな	まんじゅしゃげ	
まいて (ませて)	仲間に入れて	鬼ごっこ、まいてくれる
まくばる	一様にいきわたる	よーまくばるように掻きまわせ
またい	おっとりしている、のろい	
まっしき	全く	まっしき駄目なら
まちっと	もうちょっと	
まとう	弁償する	まとて返してや
まねくそ	ほんの少し	まねくそほどくれた

まるごし	そっくり、全部	西瓜一つまるごし貰うてきた
まるた	魚のはらわたをとっていないもの	まるたざいれ (まるた秋刀魚)
まわり	準備	はよまわりせえや
みてくれ	外観	みてくれは悪いけど 中身は一流や
むかじ	百足	
むかわり	一周忌	
むげっしょ	無慈悲	
めんずりほど	僅か	めんずりほど雨が降る
めんめに	めいめいに	
もむない、もみない、 ももない	おいしくない	このお菓子もむないなあ
やっこせで	やっとの思いで	やっこせで ここまでやれた
やりこい	柔らかい	
やんぺ	やめ	もうやんぺや
ようず	むしむし暑い	今日はようずだんな

よおすする	様子をつくろう、しなをつくる	えらいよおすしやる
よくせき	よほど、よくよく	よくせきのことやない
よこすっぱ	横面	生意気言うな、よこすっぱいくぞ
よごみ	蓬	
よさり	夜中	よさりおそおに電話してすみません
よす	修理する	この鞆よしといてな
よだちぐも	入道雲（県北部）	
よたんぼ	酔っ払い	
よばれる	食べる、ごちそうになる	今日はお昼よばれてきたわ
よわみそ	弱虫	
よんべ	昨日の晩	よんべから具合が悪うてなあ
わや	乱暴なこと、めちゃくちゃ	何もかもわやになってしもうた
ろっく	たいら	もうちよっとろっくにせなあかん

古典に出てくる言葉

「あかうなりて、人の聲々し、日もさし出でぬべし」(枕草子 ころゆくもの)

「魚…和名 宇乎 俗ニ云 伊遠」(倭名類聚鈔) 伊遠=いを

「ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋風吹とかりにつげこせ」(伊勢物語 四五)

「農作をうたてき物に厭ひけるまに。はた家貧しくなりにけり」(雨月物語 卷之二 浅茅が宿)

「打手の大將軍の矢ひとつだにもみずして、にげのぼり給ふうたてしよ」(平家物語 五之卷 五節之沙汰)

「うたてやなこの葛城山の雪の中に結い集めたる木木の梢をしもと知ろしめされぬはおん心なきようにこそ候へ」(謡曲 葛城)

「小殿たかしかきをひて、真弓うちかたげて、ひらあしださはきて行きけり」(古今著聞集 卷第十二)

「くらがり峠に出て、大坂よりの歸りをまちぶせし所に、小をとこのかたげたる菰づつみを」

(世間胸算用 卷四 奈良の庭竈)

「風俗作り、芸子に目をつかはせ、下なる見物にけなりがらせる」(世間胸算用 卷三 都のかほ見せ芝居)

「ア、術ない苦しいと悶えわなきそぞろ言」(女殺油地獄 河内屋内の段)

「主、まことにあさましく怖しく思ゆれども、更に術無し」(今昔物語 卷29の22 鳥部寺に詣でし女、盗人に値ふ語)

「せんぐり跡へ〜と、尋ね廻らねばならぬわいなア」(伊勢音頭恋寝刃 油屋の場)

「だんないかや」(双蝶々曲輪日記 角力場の場)

「帳合して見ると二十五年にはかならんはい」(浮世風呂 四編 卷之中 男湯之巻)

「そんなら早う呼び込んで、茶漬でも手向けてやりや。幽霊もさぞひだるからう」(攝州合邦辻 安井前合邦庵室の場)

「いと暗う高きに、蔦・楓は茂り、物心細く、ひだるき目を見る如く思ふに」(仁勢物語 東下り - 伊勢物語第九段のもじり)

「ひだるいか。コレ、ちやつと返事をして、こちや叱られん間に去にたいわいなう。」(心中天網島 河庄の場)

「ア、これほたへさしやんすな嗜しやんせ。さゝが過るとたはみがない」(假名手本忠臣蔵 九段目 山科閑居の段)

「これはしたり、佐渡七さん、よい加減にほたへなませ。」(双蝶々曲輪日記 清水堂の場)

「手の鳴る方へ、手の鳴る方へ、とらまよ、とらまよ、由良鬼やまたい〜」(假名手本忠臣蔵 七段目 一力の段)

「萬が細工と見えたの。鬘がまちと下った。額もけんで愛相がない」(鍵の権三重帷子)

「よくせきの事なればこそ、我から折れ出て」(浮雲 取付く島)

「その夜さり、御前に参りたれば」(紫式部日記)

「よさり此つかさにまうてことの給ふてつかはしつ」(竹取物語 中巻詞書四)

「よんべのとまりより、ことゝまりをおひてゆく。はるかにやまみゆ。」(土佐日記)

「わやにしてもさせぬ〜。手形の銀は手形の通り、取る所で取って見しよ。」(生玉心中)

「とやののに をさぎねらはり をさをさも ねなへこゆゑに ははにころはえ

等夜乃野尔 乎佐藝祢良波里 乎佐乎左毛 祢奈敞古由恵尔 波伴尔許呂波要 (万葉集 卷第十四 3529)

等夜の野まで 兎をねらつてゐるのではないが をさをさも ろくに寝もしない子のために お母さんにおこられて

斷 倭名類聚鈔 より

齒肉(ハシシ ↓ はじし)

倭名類聚鈔では「波之全」と表記

啞 啞

玉篇云斷魚方反齒之肉也

唐韻云啞音鄂字亦作口中上腭也

說文云啞於前反啞啞謂之啞爾雅云啞之龍龍友和名

由比正雪につき老中(松平和泉守、阿部豊後守、松平伊豆守連名)より駿府へ遣わした奉書の一部

又申候。由比正雪事せいちいさく、色白く髭黒く眼くりくとして、ひたい短く、口びる廣く厚くがそうにては候得共、髪をそりたるも不知由、・・

舌もつれの例

からだ(体)	→	かたら
つごもり(晦)	→	つごり
つるべ(釣瓶)	→	つぶれ
とだな(戸棚)	→	となだ
まないた(俎板)	→	なまいた
よもぎ(蓬)	→	よごみ

中には、もつれて訛ったまま正当な言葉として通用しているものがあります。

山茶花 きざんか

新しい あたらしい

新年乃始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰 (万葉集卷第二十 4516)

あらたしき としのはじめの はつはるの けふふるゆきの いやしけよごと

(新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事)

大伴家持、万葉集卷第二十の掉尾を飾る歌

秋芽子 戀不盡跡 雖念 思恵也安多良思 又将相八方 (万葉集卷第十 2120)

あきはぎに こひつくさじと おもへども しゑやあたらし またもあはめやも

(秋萩に恋尽さじと思へどもしゑやあたらしまたも逢はめやも)

沼名河之 底奈流玉 求而 得之玉可毛 拾而 得之玉可毛 安多良思吉 君之 老落惜毛 (万葉集卷第十三 3247)

ぬながはの そこなるたま もとめて えしたまかも ひりひて えしたまかも あたらしき きみが おゆらくをしも

(沼名川の 底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも あたらしき 君が 老ゆらく惜しも)

「あたらし」は、惜しい、惜しむべきなどの愛惜の意を表わすのに用いられていました。

地域比べ

この部分は、奈良県教育委員会が昭和55年度から昭和57年度までの3カ年にわたり「奈良県方言収集緊急調査」を5箇所の地域で実施した結果を収録した「奈良県の方言」から抜粋したものです。

こうして収集された「ことば」も、社会生活の変化や急速な情報化社会の進展の中で、次第に語られなくなっているものがあるようです。

音変化

下北山村 寺垣内・浦向

サ行イ音便	はずいた (外した)	ちらいて (散らして)
マ行ウ音便	たのーで (頼んで)	まぐれゆーだ (ひどく転倒した)
母音の変化	そーじゅ (掃除)	ざいむく (材木)
子音の交代	まら (未だ)	そーかろ (そうかぞ) ほーか (そうか)
音節の長呼	ばーす (バス)	なーべ (鍋) けー (毛)
促音の短呼	いて (行って)	いた (行った)

十津川村 重里

サ行イ音便	かくいて (隠して)		
マ・バ行ウ音便	きぞーで (刻んで)	あそーだ (遊んだ)	
母音の交代	こめのめしゅー (米の飯を)	やってみゅー (やってみよう)	たーたむんじゃ (炊いたもんだ)
子音の交代	おめれとー (おめでと)	ざんなし (旦那衆)	
促音の短呼	いて (行って)	いた (行った)	
連母音の同化	しもがーと (下垣内)	なー (無い)	
その他の音便	わろた (笑った)	ふこて (深くて)	あつーて (暑くて)

五条市 五条

タ・ザ・ラ行の交代	だしき (座敷)	だいさん (財産)	ねんだ (捻挫)
	でーか (冷夏)	おーで (大勢)	ぜんちゅう (電柱)
	れんせす (伝説)	あつたけろ (あつたけど)	
音節の長呼	てー (手)	ひー (日)	みーたい (見たい)
s → h の交代	せんせはん (先生さん)	おれてひもて (折れてしまつて)	よばれまひよか (よばれましょうか)
r の脱落・逆行同化	わしらよい したん なんね。としかー ゆーたー。(わしらより 下になるのだ 歳からいったら。)		
	こーたんか しゃんけお (買ったのか知らないけど)	たこ なつとーきかい (高うなつとるきかい)	
	どつかえたら (どつかれたら)	ひこーき のつとき (飛行機に乗るとき)	わんなつた (悪くなつた)

摩擦音に関して	おとったん (お父さん)	ついえー (水泳)	とら (そら)	たんちかん (短時間)
撥音添加	みんなに いたら (見に行ったら)	かえすのんで めーむかんなん ((借金を)返すので苦しまねばならない)		
縮約	とっしより (年寄り)	しまっしょ (始末書)	やまもっさん (山本さん)	うちでっけど (家ですけど)

宇陀市榛原区 赤瀬

タ・ザ・ラ行の交代	せんぞ (船頭)	しんふれん (心不全)		
ラ行音の変化	もやえやん (貰えない)	あつかよ (あるかよ)		すんのけ (するのけ)
	おこらえた (怒られた)	もーた (貰うた)		
縮約	いきまっしゃろ (行きますやろ)	にじゅうごろつきゃなー (二十五六やなあ)		らつきゃ (楽や)
	とつきゃった (時やった)	なっちゃったら (夏やったら)		につきゃの (肉屋の)
鼻音添加 (撥音添加)	のー しんに いきよった (農作業しに行っていた)		みんなに いた わさ (見に行ったらよね)	
短呼(長音や促音の脱落)	はろた (払うた)	きよか (きょうか)	いた (行った)	もてきた (持ってきた)
s → h の交代	おみやはん (お宮さん)			

大和郡山市 矢田町北矢田

破裂性の退化・脱落	もどわっから (元ばっかり)	たえて (食べて)	あすう (遊ぶ)
	あすいに (遊びに)	こーたんよーに (こぼたんように= 壊さないように)	
	てんりまえ (天理まで)	かささいせ (傘さして)	

r の脱落	そえで (それで)	ぎーのかたい (義理の固い)	ふんなやったー (そんなやったら)	
	いこかしゃん (行こうかしらん)	ぬぎまへんなんやお (脱ぎませんならんやろ)		
縮約	わせてる (忘れてる)	おせる (教える)	まっこった (蒔きよった)	…だっさ (…だすわ)
	…こっちゃ (…ことや)	きよまったん (清松さん)	すわっしよらへん (吸わしよらへん)	
促音の脱落	いて (行って)	とて (取って)	くて (食って)	
s → h、hの脱落	いわる (言わはる)	いたった (いてはった)	すんめえん (すんまへん)	
助動詞末尾スの変化	いきまっか (行きますか)	そーでんが (そーですよ)	ありまんない (ありますなあ)	
タ・ザ・ラ行の交代	ごでんちゅー (午前中)	でんでん (全然)	でんが (煉瓦)	かで (風邪)
	めれたい (めでたい)	けんたい (健在)		
短呼	さと (砂糖)	せんせ (先生)		
撥音挿生	しんによった (死によった)	ごんごー (五合)		
その他の音便	こーて (買って)	あろて (洗って)	せんさいを しないた (先妻を死なせた)	
	すずしーて (涼しくて)	かとー ゆでる、かたーに ゆでる (固く茹でる)		
	すくのおまっしゃろ (すくないでしょう)			

文末の訴えことば

下北山村 寺垣内・浦向

のー	丁寧な訴え	そーじゃのー (そうですね)
ねや	同輩や目下に対して	
よ、え		じゃーえ (そうですか)
や	ねや、ぞや、がや、わや などの複合形で現れる。	
さ、ぜ、で、ぞ		
かぞ、かろ		ほーかろ
だー、らー、わだ		わんら ざんざり きって こい らー (おまえら 頭髪を切って来いよ) も きまっとる わだ (もう決まってるよ)
こ	目下に対して問いかける	そーこ (そうか)

十津川村 重里

のー、のーら、のら	「のら」は「のー」より幾分丁寧。「のーれ」となることもある。
さ、ぞ、ぜ、ぜよ、じよ、わよ、よの、のよ、わさ、だー、わだ、よ、がいだ	などが使われる。
	うとーたんぢゃろー ぜよ (歌ったんだろうよ) ちょうちん あかして だー (提灯をとぼしてよ)
	よさー ねやで びびって きたわだ (夜中寢室に振動してきたよな)
	いー ふーふじゃったんぢゃ がいだ (いい夫婦だったんだよね)

わ、わい、わえ、わよ、わや、わの一、わの一ら	
に、なら	あろー に (あろうものか) なん ならー (なんだい)
ら、らよ	勧誘 ほろーら (掘ろうよ)

五条市 五条

な一、わな一、がな一	えらい ぞーき かけた な一 (たいへん造作かけたね)
え、え一、な一え、 やえ、どえ、わえ、のえ	あの ひとわ しょうぎ すき え (あの人は将棋が好きだよ) さー その じぶんにな一え (さあその頃にねえ) そーゆー けーかくも たえとこ やえ (そういう計画も立てておこよう) どこ いくん どえ一 (どこへ行くのです?) どやいどった わえ (どなっていたよ) いかれへん のえ (行かないのよ) まー のぼってよ (まあ上がって頂戴)
ぞ、ど、で	ほで おまはん どない しとん どー (そしてあんたどうしているのかね) むちゃな こと したら あきまへん で一 (無茶なことしたらだめですよ)
か、かい、け (問いかけ)	やすけー いたらだっ か (弥助へ行ったらですか) なにが こわい こと ある かい (何が怖いことなんかあるものか) まだ きたらひん け (まだ来ていないのか)
わ、わい、と、ね、 やんか、やんけ	あのひとわ おった わい (あの人はいたよ) なりましてんやと (なりましてんてすって) のけたら いかれへん やんか (退けたら行かないじゃないか)

宇陀市榛原区 赤瀬

なー、なえ、なよ、なーよ	「なー」は丁寧な話し方にもぞんざいな話し方にもよく用いられる。「のー」は主に男性に用いられる。
えー、よ	(さえ、わさえ、わさよ、かよ、げよ、でよ などがある。)
	しとって くれはって えー (知っていてくださってねえ) ほで まー かいてんけど よー (それでまあ帰ったんだけどねえ)
さ、わさ、ぞ、ぜ、ど	なっ しとんの ぞーっ ちゅーてー (何してるんだいって言ってー) なに こけん どー (どうして倒れようぞ、倒れやしない)
われ	しんどい われ。こっチャー (しんどいよ。こっちは)
そー	あら せんせとこやってん そー (あら 先生のお宅だったんですね)
みーさ	あの さんねんほどまえに みーさ (あの3年ほど前にね) 丁寧に言えば、 みなはれ、みなさいな となる。
他に	わろとってん てや (笑っていたんだてば) よったり おん が (四人いるよ) あれ そいでも どんかんに いかはってんやろ に (あれ それでも どれくらいに 行かれたんだろうかしら) ゆわはってん とー (言われたんだってよ) あねですねん てー (姉ですよ)

大和郡山市 矢田町北矢田

やー、えー	まってて やー (待っていてね) どのくらい つれました えー (どれほど釣れましたか)
ねん、ん、のん、やん	わすれてん ねん (忘れてるのさ) つくりよん ね ((あいつが)作るのさ) きはりましてん (いらっしやいましたの) どこに いてだふ のん (どこにおいでですか?) かんなん やん (かなわないじゃないか)
他に	だいぶ きゅーや で (だいぶん急だぜ) さよ か (そうですか)

しゃない わー (しかたがないよ) この こっちゃ げなー (このことですよねえ) いっぺん きましたんや て (一度来ましたんですって) なかったん け (なかったんですか?)
--

ここでは、文末詞の分野については、大阪弁的ないしは近畿中央部的な要素がより濃厚であるという特色がある。

間投詞

下北山村 寺垣内・浦向

みー	ほんまに みー らいねや もー (ほんとに、ねえ、来年はもう)
つい	いまらー みなー ついー もー やすみでも なんぢゃかんぢゃ ゆーて のー (今は皆ツイもう休みでもなんとかかとかかかってねえ)

五条市 五条

みー、あのみー、 みなはれ、そー	きょーえーかい やった ときに みー。まえばたやとか (競泳会をやった時にね。前畑だとか) この とき な。あのーみーえ、えらい なんの まーいぶちで (この時にね。あのほら 大規模な何の曲り淵で) そのかーり ほかの こと みなはれ なんでも しゃはります わな (そのかわり他のことは ごらんよ 何でもなさいますわね) そんとき そー はしの うえ とーって な (その時ほら、橋の上を通過してね)
---------------------	--

宇陀市榛原区 赤瀬

みーさい	あのー てぶくろの みーさい ごむ やつとんのー あんた してはるよーに (あのう 手袋の ほら、ゴムを加工してるの あんた ご存知のように)
------	--

大和郡山市 矢田町北矢田

あのみー、みなはいな	そやなー おいらやったー あのみー、いままで やまいき どんどん した じぶんやったあ あのー (そうだねえ。おいらだったら あのほら、今まで山仕事をどんどん した頃だったら あのう) ほいでー みなはいな、これわー あのー (それで ほらね、これは あのう)
そー	いま そー あのー だいどころ かみに してもーた (今 ほら、あのう台所を上にしてしまった)
われ、おまえ、おまはん	よー くわんかったら なんやで われ、ほんでー (食えなかったら、なんだよおまえ、それで)

敬卑待遇法

下北山村 寺垣内・浦向

ござる	とーさん ござった かのー (ご主人はおられましたか) 来られましたか、行かれましたか の意味にもなる。 して ござるじゃろー (知っておいでだろう)
しゃる、やしゃる、され	じゅっぱ おかしゃれ よー (十把置きなさいよ) ま っかい ゆーて みされ (まあ一回言ってみてごらんさい)
たもれ	どーぞ まいて たもれ。じゅうじに して たもる かの (十時にしていただけますか)

十津川村 重里

ござる	
-----	--

文末助詞による待遇法に大幅に依存することにおいて下北山村方言と大差がない。

五条市 五条

なはる、やはる、はる、 だす、です、ます、 はす、あす、おます	かいつて きなはれ や (帰って来なさいよ) ここで こもってなされたのや (ここに籠っていなされたのよ) いやはる かいな一 (おられるかなあ) いはります かいな (おられますかな) みんな げんきだっ か一 (みんな元気ですか) ぶじで よろしはした な一 (無事でよろしかったですね) め一 わるはんの け (目がわるいんですか) えらあす で一 (偉いですよ) ほんまに うれしおまっ き (ほんとにうれしいですわ)
よる(卑近・親近)	いかだつて どんな もんか しりよれへん (筏ってどんなものか知っちゃいない)

宇陀市榛原区 赤瀬

はる、やはる	なはる(一段高い待遇)	よる(卑辞)他称にも用いる	やがる(ヨルより一段低い卑しめの言い方)
もらう(受惠の言い回し)	お一きに ま一 かけさして もらう わえ一。 ちよつと よ一 あつて な一。 きゃして も一てん げ。 (ありがとう まあ掛けさせていただくわね。 ちよつと用があつてね。 来させてもらったんですよ。		
身内尊敬の表現	ま一 そのうちに な。 しっかり よして くれはるやら おも一さかい。 (まあその内にね。 しっかりしてくれるだろうと思うから。)		
丁寧な表現として、 名詞に	デス、ダス、 動詞に マス、 形容詞に ハス が用いられる		
接辞による待遇表現	おかげさんで		

大和郡山市 矢田町北矢田

はる、やはる なはる	ちゅーぶ わずろ一て へで しんではりまん ねん (中風を患って そして死んでおられるんですよ) せんせ きやはる ひ一 に (先生が来られる日に) また だれか一 ゆわつた ゆわる わ一 おもて な (また誰か言われたら言われるわと思ってね)
---------------	--

	よったり いらる が (四人おられるよ) きらった (来た) やくいんかい きなはらへん (役員会に来られない) ここい きなはれ (ここへ来なさいよ)
て	はーは いてだした いてだした (はあはあ。おられました。おられました。)
くだはれ	だいじに してもろて くだはれ や (大事にしてくださいよ)
ないませ	おいで ないませー (おいでなさいませ)
おます、はす	たいそに おました (大変でございました) ひとつ ちっこはすやる (一歳小さいでしょう)
身内尊敬の表現	うちらでも こともお もー みっかにあげく あたま あらわりまん が (うちらでも子供をもう三日にあげず頭を洗いますよ(嫁が))
よる(卑近・親近)	すわっしょらへん (吸わせやしない) かのんさま きてくれよる さかい (観音さまが来てくれるから) つかいぬっこる (使い抜きよる)

アспект(時間軸上のありかたを示す表現態)

下北山村 寺垣内・浦向

進行態	～よる	ふりよるか (降っているか)
存続態	～とる	ゆきや つもつとる (雪は積もっている)
進行態の過去	～よった	けぶりよった (煙っていた)
完結態		わったった (割ってしまった)

十津川村 重里

進行態、存続態について おおよそ下北山村と変わらない。

五条市 五条

進行態	～とる、～てる	のんきに やっとる らしー (呑気にやっているらしい) まんしゅー いとって (満州に行っている)
存続態	～とる、～たる、 ～てる	ほけんには いったーる さかい (保険に入っているから) いままで のこってる (今まで残っている)
終結態	～てもた、～てもた	

宇陀市榛原区 赤瀬

進行態、存続態	～とる、～てる	ちっとる (はらはらと散りつつある状態も散った結果の花一面の状態をも表わす)
存続態	～たある	ちごたあんねと (違ってるんだって)
推移態	～てった	～ていった、～てきた

大和郡山市 矢田町矢田

進行態、存続態	～てる、～とる	じーっと あれ みてたら: ふだ かきあつめとるけども
存続態	～てる、～とる、 ～たる	やかまし ゆーとるけども やで: どち もってる: あいたった (空いていた) えーの わかっとるけど (わかってるけど)
終結態	～てまう	たたきこんでまう

断定の助動詞

下北山村 寺垣内・浦向

じゃ、や、
(推量) じゃろー、やろー
(過去形) じゃった、やった

五条市 五条

や、じゃ(老年層)
(推量) やろ
(過去形) やった

宇陀市榛原区 赤瀬

や、じゃ(特定の)
(丁寧な断定) です、 だす
(推量) やろ
(過去形) やった

大和郡山市 矢田町矢田

や、じゃ(老年層)
(丁寧な断定) です、 だす

打消しの助動詞

下北山村 寺垣内・浦向

ん	はかん (掃かない) はきゃせん (掃きはしない) いえん (言えない)
過去形は	～なんだ (掃かなんだ) ～んだ ～んかった
仮定形は	～にゃー (かしてもらわにゃー) (ちゃんとしとかないにゃー)

十津川村 重里

ん	はかん (掃かない) はきゃせん (掃きはしない) いえん (言えない)		
過去形は	～なんだ (掃かなんだ)	仮定形は	～にゃー ～んにゃー
「ん」の前接母音の長呼形	じゅー しらー (字を知らない)		

五条市 五条

ん、やん、へん	おぼれやん (溺れない) 取りはせぬ→とりゃせん→とらへん→とれへん しれへん(知らない)
	のれへん (乗らない)
	いぬ つないどいてくれやな こまるで (犬を繋いでおいてくれないと困るよ)

過去形は	～なんだ ～んだ ～んかった
	わしも はじめ しらなんでんけど (わしも初め知らなかったんだけど) いかんだらよかった (行かなかったらよかった) あがらんかったわ (上がらなかったわ)
不可能の意は	にげれん (逃げられない) あるかれへん (歩かれない) よー あるかん (歩けない) かいつてったん ちゃいまん の (帰って行ったんじゃないんです?)

宇陀市榛原区 赤瀬

ん、へん(ひん)、やん	あらへん (ない) あらひん (ない) みやん (見ない)
過去形は	～なんだ ～んだ ～んかった
義務を表わすとき	せんならん、せんなん (せねばならぬ)
形容詞の否定は	よーない、えーことない (よくない)

大和郡山市 矢田町矢田

ん、へん、えん	ゆわしめえん ね (言わないですよ)
やん	できやん、できやへん、でけへん、でけん (できない)
過去形は	～なんだ ～んだ ～んかった
仮定を表わすとき	できーでも (できなくでも) せんと (しないで) (“しないで”も“せんと”と言うが、アクセントで区別する。) いろんなん なげにゃー (いろんなのがなければ)

推量の言い方

下北山村 寺垣内・浦向

う、よー	あろー (あるだろう) こよー (来るだろう) あるじゃろー (あるだろう)
過去の推量は つろー	あーじゃっつろー (そうだっただろう)
打消し推量は んじゃろー、まい	しらんじゃろー (知らないだろう) しらまい のー (知らないだろうね)

十津川村 重里

ろー	きれろー (切れるだろう) なかるー (ないだろう)
打消し推量も	できんかろー (できないだろう) ゆわんならんかろー (言わねばならないだろう)
じゃろー、やろ	
その打消し んちゃろー、んやろ	
過去の推量は つろー	そーじゃっつろー (そうだっただろう)

五条市 五条

ほとんど「やろ」でこと足りる。形容詞の推量形も通常は「ないやろ」のように言うが、稀に

みすわ もー くる こと なかるーと そない おもてー (水はもう来ることなかるうと、そう思っ) のような例もある。

打消し推量に「まい」を使うことは、ほとんどない。「んやろ」「へんやろ」が主である。

しんぼして くれまへんやろか (辛抱してくださいませでしょうか)

他に、せー ひくいかして (背が低いらしく) のような一種の推量の表現がある。

宇陀市榛原区 赤瀬

やる	あるやる (あるだろう)
打消し推量 んやる	
丁寧な形 でっしゃろ、だっしゃろ、まっしゃろ、	

大和郡山市 矢田町矢田

やる、でっしゃろ、だっしゃろ、まっしゃろ	
とちゃうか、とちゃうやるか	あめと ちゃうやるか (雨じゃないか、雨だろう)

動詞の活用

下北山村 寺垣内・浦向

一段・変格活用の動詞の五段活用化

こらなんだ (来なかった) やめれ (止めよ) こーて (買って) かって (借りて) もりてくる (漏れてくる)

十津川村 重里

「か」の五段活用化

きれるー (切れるだろう) でらん (出ない) だれも こらなんだ (誰も来なかった) くれりゃーせん (呉れはしない)
 にげかねりよった (逃げかねていた) ほめりよった (誉めていた)

形容動詞の活用では

たのしみなかった (楽しみだった) そがなかった (そんなだった) かわいそーなし のー (かわいそーだしねえ)

五条市 五条

連用形命令法

がっこ いきーて わし ゆーて (学校へ行きなとわしが言って) そこで たんねて みー (そこで尋ねてごらん)

一段活用動詞の五段化

にんげんさま ひとつつも たばらんと むしばっかし たべて なー (人間さまはちっとも食べないで虫はかりが食べてねえ)

たたみ あげらな あかん ー (畳をあげなければだめだよ) おちれへんわ (落ちないよ)

宇陀市榛原区 赤瀬

ナ変 しぬる(死ぬ) いぬる(去ぬ) くわーとして しぬる ちゅー ことわー (かーっとして死ぬということは)

連用形命令法 あれ みーさ (あれをご覧よ)

変格活用の未然形 こん、きやん、せん、しやん

形容動詞の過去形 しづかなかった (静かだった)

大和郡山市 矢田町矢田

命令・勧奨の言い方 命令系によるのと、連用形による言い方が盛んである。

えーもん こーて ぬーきよ よ (いいものを買って温かく着よな) なつえはん あじおいや (夏江さん、よく味わいなさいね)

にじゅーまんほど もって いきー (20万円ほど持っていきな)

禁止の言い方 「～な」のほかに、「～たらあかん」がよく用いられる。「くれるな」のほかに「くれな」という言い方がある。

はなしかいわ してくれ な (放し飼いはしてくるな)

「が」格の表わし方

下北山村 寺垣内・浦向

「あ」という音になることが多い。のみあ とりもつ えんで (蚤がとりもつ縁で)

十津川村 重里

「ん」となることが多い。としん よつても (歳が寄つても) それん のこつとる わ (それが残っているよ)

五条市 五条

主格助詞が隠在する傾向がある。もー ひー たつて (もう日がたつて) めー わるはんの け (目が悪いの?)

方向、場所の表わし方

下北山村 寺垣内・浦向

「に」格、「へ」格を「～いみて」(～へ向いて)で表わすことが多い。

にとぶくろいみて べんとー いれて (二斗袋に弁当を入れて) わしゃ しんぐで おつたんじゃ (わしは新宮にいたんだ)

十津川村 重里

「～いみて(方向格)」「～で(に格)」の言い方が盛んである。

ほんけみて (本家へ) ここで ゆるりん あつて (ここに囲炉裏があつて)

五条市 五条

方向格は「～えむいて」「～いみて」 どぼつかえむいて はなしーに いった (土木課へ話をしに行った)

宇陀市榛原区 赤瀬

「～いみて」がよく用いられる。 たーいみて うめて (田に埋めて)

大和郡山市 矢田町矢田

「～いみて」「～えさいて」 おもやえさいて (母屋の方へ)

接続表現

下北山村 寺垣内・浦向

理由:	よって、よってに、いて、もんで、すか	
逆接:	けど、けんど	
ながら:	もて	なきもて いく (泣きながら行く)

十津川村 重里

理由:	すか、さか、よって、よってに	
逆接:	けんど	
ながら:	もーて	
並列:	なり	げっきゅーわ いーなりー (月給はいいし)

五条市 五条

理由:	よってに、さかいに、はかい、で	きー つけて いくよってに (気をつけて行くから) ほやよってに な (だからね) まってまっさかいに (待っていますから) にぎとんねんやかかいに (握っているんだから)
-----	-----------------	---

ながら:	もて、もって	ききもて いきます (聞きながら行きます) おもいもって (思いながら)
------	--------	--------------------------------------

宇陀市榛原区 赤瀬

理由:	さかい、はかい、さげ、はげ、よって、よってに
-----	------------------------

大和郡山市 矢田町矢田

理由:	よって、よってん、よってに、さかい、はかい、さかいに	
「でも」	かて わいかて な (私でもね)	
ながら:	もって	～て ゆいもって はしってきまふ ね (～と 言いながら走ってくるんですよ)
こそ	こされ	わかいんならこされや のー (若いうちなればこそ できることだね)

反語の表現

宇陀市榛原区 赤瀬

そんな しんばいする こと いっ かよ (そんな心配することがいるものかね)	いよん かよ (いるものかね、いやしないよ)
なに こけん ど (どうして倒れよう、倒れはしない)	なに あん でよー (どうしてあろうか、あるものか)

感動表現

宇陀市榛原区 赤瀬

どのくらい はよ でけっ ど (どれほど早くできることか)	なんぼで じょーぶな こー (なんとまあ丈夫な子だこと)
-------------------------------	------------------------------

語詞、用語

下北山村 寺垣内・浦向

代名詞

自称	げー、げろ(わが家)、わし、あから(複称)
対称	われ、わんど(おまえとこ)
他称	てき(彼、あいつ)

たろー(長男) じろー(次男) さぶろー、さぶ(三男) ほんそ(長男) ほんそのたまり = 大事な男子

ひりかす(5~6人の子の一番下の子) とー、とーさん(他家の主人)

おーきんぴら(大のおてんば) すっこりあま(至らぬ娘) すっこれさぶ、あほだらさぶ、あいかりさぶ、うとすけのさぶ(馬鹿な三男)

かしこさぶ(賢い三男) じょー(既婚女性の蔑称) あま(未婚女性の蔑称)

おどろく(目が覚める) あゆぶ(歩む) ー(良い) ー(多い) せわーなー(世話はない、骨が折れないで結構だ)

してから(物心ついてから) ひとごと(だれもかれも) ーに(そんなに) ーに(こんなに) なして(どうして) だそ(誰か)

おおきに(大いに) よかれさんばちに(でまかせに、思いつくままに) ーからゆほど うった(ひどく頭を打った)

むずしらんかた(全く知らない人) もー ゆっり あわん のー(しばらく会わないねえ) あかの よい じょー(全くの宵だぞ)

つー(という) ーな こめの めしら のー(そんな米の飯なんかねえ)

十津川村 重里

じゃー (そう) じゃーじゃー (そうそう) じゃーけんど (だけど) そがに (そんなに) どかな (どんな) ー (良い)
といー (遠い) おいかった (多かった) まっと (もっと) いけつとる (生きている) つろーて (連れて) おめく (怒鳴る)
してから (物心ついてから) おどろく (目が覚める) よのまごら (他の孫ら) いまら そんな ことって (今なんかそんなことって)
げんこつ すりもーだろかー、 てちなぐたるかー、 てちみそつたるかー、 てちくわしたろかー (拳骨でなぐることをいう)
しよーがつさま (正月)

五条市 五条

としばえのひと (年配の人) わい (私) おまはん (あんた) ほかさん (ほかのお方) キリストはん (キリストさま)
おはよーさん (お早う)
かさでも かって かえろか (傘でも借りて帰ろうか) あこ なってきた (明るくなった) どない (どのように) こない (このように)
おこし (いらっしゃい) ーえ なかなか (いいえ、どういたしまして)

宇陀市榛原区 赤瀬

だいぶに、だいぶ、だーぶと、だい、だえ、だん (だいぶん) おくばのどよぼし (奥歯の土用千し、大笑いすること)
ひだりがみ つく (ひだるい神さまがとりつく、空腹のため腹に力が入らない意) じっと しましたか (痛みが治まりましたか)

大和郡山市 矢田町矢田

わい (私) やつ (奴) ぼん (息子) おと (父) おか、おかん (母) いんきょ (分家) おーむし (太っ腹でよくよせぬ人)
ばくごはん (麦飯) ねやす (寝かせる) あんばいと (ぐあいよく) だーぶに (だいぶん) ほんに (本当に)
応答辞に「へー」がよく用いられる。訪問辞は「ごめん」。夜の訪問辞は「おしまい」。朝の挨拶の一つに「おはよーさん」がある。

会話例

奈良県教育委員会刊行「奈良県の方言」収載の中から、幾つかを拾いました。カタカナ書きの会話を平仮名に書き改めてあります。

買い物場面での会話

下北山村 寺垣内・浦向

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ こんちわー・ はいー・ いそがしー のー・ はいー・ あの さー。まごらの くつー かいに きたんやけど
のー。・ あ、じゃー え。まごわ おーっと いくつやった らいのー・ いや き。うーえーあー おとこで いちねんせーなんやしー
したー いつつん なった あまなんやけど のー。・ あ、じゃー え。いちねんせー ちゅーと にじゅっセンチ
ぐらいじゃろーし のー。・ んーん。にじゅっセンチじゃ なー、じゅうはちか
じゅうくやと おもーたんじゃけど のー。 | <ul style="list-style-type: none">・ 今日・ はい・ 忙しいですね・ はい・ あのね。孫らの靴を買いに来ただけだね。・ あ そうですかい。孫は おっと 何歳だったかねえ。・ いやき。上の子は 男で 一年生なんだし、下は五つになった
女の子なんだけどね。・ あ、そうですかい。一年生というと 二十センチぐらいだろうねえ。・ うん。20センチではない。18か 19だと 思うんだけど ねえ。 |
|---|--|

- じゃ え
- したわ じゅうさんぐらえやと おも一んじゃけど。
- いつつやったら そんな もんぢゃ の一。 きょ一びあ一 な一
んせ むじりか この いろいろ えのや かいだ やつわ
よ一 てるんで の一。
- これしか な一ん かの一。
- これや よろこんで てるんぢゃ ぜ こりゃ一
- じゃ一 え一。 いくらぐらい かいの一。 これ。
- これや にそくで の一。 さんぜんえんなんぢゃ かの一。
- ぢゃ一 か一。 なんとか ちょっと た一か一よに おも一けど ちょ
と ま一けて もらえん かの。
- ぢゃ一 え。 きょ一びあ き。 あんまり も一からんのや
ぜ一。
- な一のむ。 わかや。 ち一た一 まけとかされ。 にそくも かう
んぢゃのに。
- の一。 ま あの おいさんちら一 いつも きて くれるんぢゃで
ま にひやくえんなり ひかして もらお かいの一。

- そうですか。
- うん。 下は 13センチぐらいだと 思うんだけど。
- 五つだったら そんな ものだね。 このごろは なにせ 無地よりも この
いろいろ 絵の 描いたやつが よく出るのだね。
- これしか ないんですかね。
- これは 喜んで出るんだよ。 これは。
- そうかね。 いくらぐらいかね。
- これは 二足でね。 三千円なんだがね。
- そうですか。 なんとか ちょっと 高いように思うけど ちょっと 負けて
もらえないですかね。
- そうですか。 このごろは き。 あまり もうからないんだよ。
- 頼む よな。 すこしは 負けておきなよ。 二足も買うんだのに。
- ねえ。 まあ あの おじさんらは いつも来てくれるんだから まあ
200円なりと値引きさせてもらいましょうかねえ。

・ じゃ え。 ちゃ まー にせんはっぴやくえんぢゃ のっ。

はい。

・ はい。 にせんはっぴやくえん の。

・ あっ。 おおきん のー。

・ はいはい。 おおきに おおきに。

・ はい。 どーも どーも。

・ そうですか。 ではまあ 2800 円ですね。 はい。

・ はい。 2800 円 ねえ。

・ あっ。 ありがとう ねえ。

・ はいはい。 ありがとうございます。

・ はい。 どうも どうも。

買い物場面での会話 宇陀市榛原区 赤瀬

・ こんにちはー

・ あっ おこしー まいぞ おおきにー

・ わし まごの ズックぐつー かいにきてんけどな

・ はー

・ ここのは えーの あるけい

・ あー いろいろ ありますけどな あの おまごさんて あのー
おとしーわ どのくらいだすの

・ おとこのー こどもやけど な

・ 今日は

・ ああ いらっしい 毎度ありがとうございます

・ わし 孫の ズック靴を 買いに来たんだけどね

・ はあ

・ ここのは いいのがあるかね

・ ああ いろいろ ありますけどね。 あの お孫さんというのは
あのう お歳は何歳ぐらいですか。

・ 男の子供だけどね

- はー
- それ いま しょーがっこー いちねんせー なりょんね げ
- はーはー
- ほいてー したのほーが な
- はーはー
- おんなの こどもでー いくつか なる おとごや げ
- はーはー あー そーだすけー。おとこさんのだつ。いろいろ あ
のー むこにも あの あれ ちょっと みてー なが あのー ど
んなーんなど ありますけど なー。まー あのー おとこさんー
やったら いちねんせやったら このー このいろは どーだつ
かなー。この このくらのい のーどの とこで。
- あー。そのー そやなー。おとこやった そんな いろ えーやるかな
ー。
- はー まー このー いろの てーが よー あのー みな あの
ー こーて かえて くれはりまんね で。これ。
- あー。そーけー。
- はーはー

- はあ
- それ いま 小学校一年生に なるんだがね
- はあ はあ
- そして 下の方がな
- はあ はあ
- 女の子で 五つになる 乙子なんだよ
- はあ はあ。ああ、 そうですね。 男のお子さんですか。
いろいろ あのう 向こうにもあの あれ ちょっと 見て あのう
どんななりと ありますがね。まあ あのう 男のお子さん だ
ったら 一年生だったら この この色は どうですかねえ。この
くらの程度のところで。
- ああ。その そうだねえ。男だったら そんな色が いいでしょうか
ねえ。
- はあ まあ この色のものが よく あのう みな あのう 買って
くれますんですよ。これ。
- ああ。そうですね。
- ははあ

- んー。それー おとこのー なー。まー それー じゅーごぐらい やった えーやろと おもね さえ。
- ははー。じゅーごー なー。
- あー
- はー。これお。
- ほいてー
- ここに これ じゅーごー。これ どーだす て。
- セや なー。それやーたー まー おとこのー いろあいに。
- これやったら よー あのー ちょーど あのー おとこのー こーやった これー やったら えーと おもいまふけど なー
- あー。んじゃ おとこの それにしとくわ。
- はー
- ほいてー おんなのー こどもの やつー みてん け。
- はー。これ ちょっと こっちにあんね さ。
- あー
- ここにも あの いろいろ あんねけど これもー あの もんすーって な どんかいほどの

- んー。それ 男の ね。まあ それ 15センチぐらいだったらいいだろと思うの き。
- はあ。15センチ ね。
- ああ
- はあ。これを。
- そして
- ここに これ 15。これは どうですか。
- そうですね。それだった まあ 男の色合いに。
- これだったら よく あの ちょーど あのう 男の子だったら これだったら いいと 思いますけど ね。
- ああ。では 男のは それにしておくよ。
- はあ
- そして 女の子の 靴を見てくれませんか
- はあ。これ ちょっと こっちにあるんですよ。
- ああ
- ここにも あの いろいろ あるんですが これも あの 文数って どれぐらいほどの

- ・ おんなー あのー いつつやさけん じゅーごぐらいで えーと おも ねん
- ・ ははーん。あ、そーだす かなー。これ どーだす て。
- ・ セや なー。それも えーけどー その むこに ある そ その むこの ほー いろ えーよに おもうわ。
- ・ あー。そーだす かなー。
- ・ あー。それー なに けー。にそくてー。
- ・ そーだフなー。まー しらん かおやらへんしー これー ふつーわー あーん どしとこ ぞなー。もー しらん かおやらへんし なー。にせんごひやくえん。これー いっそくて なー。
- ・ はー
- ・ せんさんびやくえいーん。ほんでんー にそくて にせんろっぴやく えんに なんねけど な。
- ・ はー
- ・ まー これー こどもさんやけども も おとなーと かわらしまへんね さえー なー
- ・ そー かー。そんなーん。あんまり そやけおー たかいなー。
- ・ 女 あのう 五つだから 15せんちぐらいでいいと 思うんだよ
- ・ はあはあ。あ、そうですかね。これは どうです。
- ・ そうですね。それも いいけど その向こうに ある その 向こうの 方が たいへんよいように 思うよ。
- ・ ああ。そうです かねえ。
- ・ ああ。それ なんですかね。二足で (いくら?)
- ・ そうですね。まあ 知らない顔ではないし これ 普通は ああ どうしておこうかなあ。もう 知らない顔ではないし ねえ。 2500円。これ 一足で ね。
- ・ はあ
- ・ 1300円。それで 二足で 2600円に なるんだけどね。
- ・ はあ
- ・ まあ これ お子さんのだけけど もう 大人と かわりませんのですよ ね。ねえ。
- ・ そうか。そんな。あんまり だけど 高いねえ。もう ちよつと

まー ちょっと まけとけよー。

- なー。まーん。しらんかおやらへんし なー。おーにつさんのこっちゃん。こーて くれはるさかいに まー まけて まー せやけど せやけ こんなんー もっからへんさかいやけど ひゃくえんなど まけときまつ か なー。まー にせんごひゃくえんー んだ もらいまっさー。
- そー か
- はー
- じゃー それ もーて いぬわ
- はー。おーきに。まー こんな あーのー ほかの みせで あんな あーのー こねーん まからへん あーのー なにやさかいに だれにも もー ゆわんといて おくなはれよ。もー おまえはんやさかいに もー まけとんねけどー。
- よっしゃ よっしゃ
- はー

負けておけよ。

- ねえ。まあ。知らん顔じゃないし ねえ。大西さんのことだし。買って下さるから まあ 負けて まあ だけど だけど こんな 儲からないからだけど 百円なりと 負けておきますかねえ。まあ 2500 円 そしたらいただきますよ。
- そう か
- はあ
- では それもらって 帰るよ。
- はあ。ありがとう。まあ こんな あーのう 他の店で あんな あーのう このように負からない あーのう なんだから 誰にも もう 言わないで ください よ。もう あんたさんだから もう 負けているんだけど。
- よきた よきた
- はあ

老年男子と若年男子との会話 十津川村 重里

A. 明治41年生 B. 昭和27年生 C. 昭和34年生 D. ?

A. ん。みな それ かたな きーて あの かどわけ ちゆの
いったんじゃ。

C. うーん。あー。そら はなし ちよつと も ああ おじさん
おしえてよ。(A. ん) いっしょやけど かどわけ ちゆて
わかるー。(B. え) かどわけ。

A. かんどわけ ちゆての

B. しらーん

A. そりゃー おまえら しらん わ。なま おれ かたー いっぺん
やってみゆー

C. おー。(笑) しょうがつの あいさつなんや とー

A. しょうがつの がんじつの あいさつ。まー こりゃ こーして もって
いく わのー。(C. うーん) ほいて まー その そこい きて
おはよー ございます ちて まはいる わけじゃ わよー。(C.
うーん) ほいた まー こっち おく わけじゃ。これわ(C. うん
うん うん ふん) ほいで まー こー ちよつと ひらけて しんねん

A. ん。みな それ 刀を差して あの「かどわけ」というのに 行った
んだ。

C. うん。ああ。その話を ちよつと もうああ おじさん、教えてよ。

(A. うん) 同じように若いけど「かどわけ」といって分かる?

(B. え?) かどわけというの。

A. かどわけ といっって ね。

B. 知らないよ

A. そりゃ お前たちは知らないよ。ならまあ おれが 型を 一度
やってみよう。

C. おお。正月の 挨拶なんだった。

A. 正月の 元日の 挨拶。まあこれは こうして 持って行くよええ。

(C. うん) そして まあ その そこへ 来て お早う ございますと言って
まあ 入る わけだ よね。(C. うん) そしたら まあ こっちへ置く
わけだ。これはね。(C. うん うん うん うん) そして まあ こう
ちよつと 聞いて「新年 明けまして おめでとー ございます。かどわけ

あけて おめれとー ございます。かどわけに まいりました
ちゅ。で あの ちよつとおぜんを はいしゃしてくれっ ちゅ わけ
じゃ (C. ふーんふふんー) その もてきた もちを のー。
(C. んー) その ぜんい いれる わけなんや (C. んんんん)
ほいでー これお また もってて ま この ほとけさまの まえ
じゃー。こがにして ほいで ほとけさまい もち あげて の。
(C. うんんん) ほいで まー これお ま このくらい ひろげて
よ。ほいて ほとけさまえ こんねんも どーぞ よろしく
おねがいしまーす ち。これが あいさつや。(C. ふーん)
こーゆー ことー したんねや。むかし の

C. ふーん。それわ あれ。ぶんけつ ぶんけつ ていんから
ほんけみて。

A. んー。ほんけじゃ の。ほんけ いて。まにしんが いちばん
あにきじゃったら おれ じろーじゃろー。ほで にしんのか
てーみて いく わけじゃ わや。ん。そーにして かならず
あの こつちにあ かたな ちゅ もな みな あった。ほとんど
あった いえに。(C. んーん) んで これわー まー も

に 参りました」という。で、「あのちよつとお膳を 拝借してくれ」
というわけだ。(C. ふうん) その 持ってきた 餅を ね。(C. うん)
その 膳に入れる わけなんだ。(C. うんうん) それで これを また
持って行って まあ この 仏様の 前だよ。このようにしてそして 仏様に
餅を 上げて ね。(C. うんうんうん) それで まあこのぐらい 広げて
き。そして 仏様へ「今年も どうぞ よろしく お願いします」と
いう。これが挨拶なんだ。(C. ふーん) こういふ ことをしたんだ。
昔は。

C. ふうん。それはあれですか。分家 分家 というのから 本家の
方へ?

A. うん。本家だ ね。本家へ行って。ま 西さんが 一番 兄貴
だったら おれが 次男だろ。それで 西さんの 家庭へ 行く わけ
なんだよ。ん。そのようにして必ず あの こつちには 刀 というものは
皆 持っていた。ほとんど あった。家に。(C. うん。)
で。これは まあ もう 日の丸の 扇だ。(C. あ、ほおう) あの

ひのまるの お おーぎや。(C. あ、おーん) あの とーじわ。こ
ちよつと ひのまるの … で こーして つないで ほいで かしま
って こー ま ほんねん いちねんじゅー おたがいに なかよく
らーて くれと (C. んー) ちゅー いみじゃ わのーら。(C. んー)
そーゆ ことした わけじゃ。

- D. むかしから ねんしまわり ちゅて の。かならず した が。
- A. ん。ねんしまわり。これ も かならず した がや。 んで もちわ
もー べつに こんな おーきな こしらえた わけ。
- C. あー。その もって いき もって いく やつ。
- A. もってく もちわ。 んー。
- C. いまー ほんまに しんるいずきあいつて そがーい のー ねんしの
あいきつに いく ところ ないし。
- A. おそらく ない の。
- D. せんよーになった。
- A. まー おれあ ほん こどもちやつたえ おぼえとるすか
(C. ふーん) おそらく これ おぼえとん しよけ おらー。
- D. しらんやろ な。

当時は ね。

こー ちよつと 日の丸の … で こーして つないで そして
かしまつて こー まあ 本年 一年中 お互いに 仲良く 暮らして
くれと (C. うん。) という 意味だ よねえ。(C. うん。)
そーいうことを したわけだ。

- D. 昔から 年始回り といって ね。必ず したよ。
- A. ん。年始回り。これ もう 必ず した よね。で 餅は も
別に こんな 大きなのを 作った わけ。
- C. ああ。その 持って 持って 行く やつを。
- A. 持って行く 餅はね。 うん。
- C. 今は ほんとに 親類付き合いつて そんなに ねえ、 年始の
挨拶に 行く 所も ないし。
- A. おそらく ない ね。
- D. しないよーになった。
- A. まあ おれは ほんの 子供だったし 覚えているから
(C. ふうん。) おそらく これ 覚えている 人 たくさんはいないよ。
- D. 知らないだらうね。

A. しらんやろ。んー。しらんと おもう わ。ん。

C. あの ぼんや なんかに の。この ぼたもち つくってー いたり
するのわー

A. そりゃ あった わよ。ん。

C. あったけど のー。

A. もー あの じぶん にわ のー。しょーがつか ぼんかほかかか
たのしみ ちゅ もな なかった わの。(C.んーん) のーら。

(C.そや の) そがい しょったら まんざい きたのーら。よーに
こきゅー ひーて のーら。(D.あー) こりよー もって きた わよ。

おー。そがー しょったら こーだんが きたもやで (D.あーん)
いたばしこーだん ゆて。ほで ちくおんきが はやとつた わ。

(C.あーん) らっぱつきの

C. こー ひて まーす やつ。(A.おー) にしきんとこの おやじ
よー とつとつた わよ。

D. らっぱの おーき になった

A. おー。それお たらわらの しもにしー はじめて こーたんや。
(C.あーん) おいら かしこまって きーた もんぢゃ。(笑)

A. 知らないだろ。うん。知らないと思う。うん。

C. あの 盆や なにかに ね。この 牡丹餅を 作って 行ったり
するのは、

A. そりゃ あった よね。ん。

C. あったけど ねえ。

A. もう あの 頃には ねえ。正月か 盆かよりしか 楽しみ という
ものはなかった よね。(C.うんん。) ねえ。(C.そうですね。) そ

こうしていたら 漫才が 来た ねえ。上手に 胡弓を 弾いて ねえ。
(D.ああ。) これを 持って やって きた よ。おお。そうしている

うちに 講談が来たもんだ。(D.ああん。) 板橋講談 と 言って。
で、蓄音器が 流行っていた よ。(C.ああん。) ラッパ付きの

C. こうして 回す やつ? (A.おお。) 西さんとこの 親父が
よく 取っていた よ。

D. ラッパの 大きくなった

A. おお。それを 田良原の 下西が 初めて 買ったんだ。

(C.ああん。) おれら 正座して 聞いた もんだ。(笑) 田良原の

たらわらしら。みな ききに いったんぢゃ。(D. あー) こいやー
あの一 れこーど かけるすか こい よっ ちて (D. んー)

人たち。みな 聞きに 行ったんだ。(D. ああ。) 今夜 あのう
レコードを かけるから 来いよって言ってね。(D. うん。)

老年男子と老年女子との会話 五条市 五条

A. 大正12年生 女子 B. 明治40年生 男子

A. まー よー してます ぜー。だいこでも なんでも なっぱ
でも まきますやろ。(B. あー) もー しらん まに むし
くわれてますんやん。(B. なー。くわれるなー。) ふーん。
ほいで なー。うまいーこと にんげん さん にてる。
ぶるっと ちっそ なって おちて なー。(B. せやせや。
そーそー。) ほーぜ つちの なか まるめこんで はいって
しもたー もー んなもん いかれとるよな もん。なんぼ
こない みたかて わかれしま (B. わかれへんねや。
なー。) うまいーこと できてます わえー。

B. あいづあー あの一 じべたん そこから わきて やる やつ
やさかい なー。(A. あー) ほんでん あえ なんとか
ゆんや。あの むしー。

A. あ つちの なかから なん し でて きまんねやろ か。

A. まあ よく 知っています よ。大根でも なんでも
菜っ葉でも 蒔きますでしょ。(B. ああ) もう 知らないうちに
虫に食われていますのよ。(B. ねえ。喰われるわねえ。)
ふうん。それで ねえ。上手に 人間さまに 似てる。
ぶるっと 小さくなって 落ちて ねえ。(B. そうそう。そうそう。)
そして 土の 中に (体を) 丸めこんで 入ってしまったら
もう なんだって いかれてるようなもの。いくらこうして見たって
分かりやしません。(B. 分からないんだ。) 上手に
できてます よねえ。

B. あいつは あのう 地面の 底から 沸いて する 奴だから
ねえ。(A. ああ) それで あれ なんとか 言うんだ。あの
虫は。

A. あ 土の 中から 出て くるんでしょうか。

B. なかに いまんでー。(A. ふん) ほてー じかんできにわ
いつごろ かつどーすんのか わからんけどもー (A. ふん)
たぶん ばんの うちに やるんや なー。

A. よるだす わ。あいつら めー えー めー してまんや
なー。

B. みどいがわはんのでも このくらの じくん なったかて
ぶちゅんと はきみで きたよーに なー。(A. そーなん。)
はー。たおれてもとる わ。(A. ふん) ほて そこらたしー
その あのー はーやとかー そのー いっぱい くそが
のこつとる わー。なー。ほんでん そいつお なー。

A. なー。ほして それお むしにも な。(B. あー。) きくの
すきな むし なー。なーの すきな むし なー。ほいて
あんな あの さんしょにつく むし なー。(B. あー。)
みな ありますんや なー。あれ。ふん。

B. ほんで あのー じめんからー くる やつわ その ひがいに
おーた そのー きられた とこ そえから そのー ふんとかー
(A. はー。) それお めあてにー こそこそと そのー
ねかたお ほって みたら な。(A. ふん。) こなして

B. 中に いますよ。(A. ふん) そして 時間的には いつごろ
活動するのか 分からないけど (A. ふん) 多分 晩の
うちに やるんだ ねえ。

A. 夜です よ。あいつらは、目 いい 目を してますの
ねえ。

B. 緑川さんのでも このくらの 軸に なっていたって ぶちゅん
と 鋏で 切ったように ねえ。(A. そうなの。) はあ。
倒れてしまってるよ。(A. うん。) そして そこらあたり その
あのう 葉だとか その いっぱい 糞が 残ってる よ。
ねえ。それで そいつを ねえ。

A. ねえ。そして それを 虫にも ね。(B. ああ。) 菊の
好きな 虫 ねえ。菜の好きな 虫 ねえ。そして あの
あんな あの 山椒に 付く 虫 ねえ。(B. ああ。) 皆
あるんです。ねえ。あれ。ふん。

B. それで あのう 地面から 来る 奴は その 被害に
会った そのう 切られた 所 それから そのう 糞だとか
(A. はあ。) それを 目当てに こそこそと その
根の部分を 掘って みたら ね。(A. うん。) こうして

なーえ。(A. おりまっけ。)おりますー。(A. ふーん。)
あー。

A. ふーん。なー。(B. あー。)ほて(B. そらー。)それ
それおころすあの一あのくすりあるけどなー。

(B. ふんー。)あの一むしのきらいなにおいする
くすりなー。(B. あー。)このうえきの一あのねかた
えでもこーおいといたらなー。(B. あー。)あのむし
けーへんのでってゆいますけどえー。(B. あー)そや
けどたべるものなー。とこそんなんすんのんきもち
わるいしなー。(B. あー。)ふーん。もーほんで
わたしもこしなー。あの一きねんなっぱつくったけど
ーもむしのなーつくったつとるよーなもんでなー。

(B. むしやしないじゃ。)にんげんさまひとつもたべらんと
むしばっかしたべてなー。(B. あー。)もーあかんと
おもてあきらめて(B. あー。)ほてもーこしなー。
なーつくらんとなー。(B. はー。)たまねぎーやったら
なー。たまねぎとかほてからねぎーやったらなー。

ねえ。(A. おりますか。)おりますとも。(A. ふうん。)
ああ。

A. ふうん。ねえ。(B. ああ。)そして(B. そりゃあ。)それ
それを殺すあの一あの葉はあるけどねえ。

(B. ふうん。)あの虫の嫌いな臭いのする葉ねえ。
(B. ああ。)この植木のあの根元にもこー置いて
おいたらねえ。(B. ああ。)あの虫は来ないんだよって
言いますけどねえ。(B. ああ。)そうだけど食べる物の
ねえ。所へそんなのするのは気持ちが悪いしねえ。

(B. ああ。)ふうん。もうそれで私も今年はねえ。
あの一去年菜っ葉作ったけれども虫の菜を作って
やってるようなものでねえ。(B. 虫養いだね。)人間
さまはちっとも食わずに虫ばかり食べてねえ。

(B. ああ。)もうだめと思ってあきらめて

(B. ああ。)そしてもう今年はねえ。菜を作らずに
ねえ。(B. はあ。)玉葱だったらねえ。玉葱とか
そして葱だったらねえ。

(B. あー。) その うちー むし あんまり (B. んー、
そやろ かー。) つけしまへんし しょーどく あんまり せんでも
よろしやろー。ほて あれ みなはれ。よろし わなー

(B. あー。) ねぎやたら からだに ー。ほんでん もー
ねぎに しょーと おもて ー。もー むしと にんげんとの
ちえくらべでー。んな むしに まけとった つまらんと
おもて。

B. そら また むしわ むしで にんげんの ちえーに うわまーる
よな かんがえ もつとるか わかれへん ー。

A. もってます でー。ほんまーに えらい えらあす でー。

B. なんにも それー ゆーて きかしてー (A. ふん。)
きょーいく すんでも ないけどー (A. ふん。) しぜんに
そいつら まー そな ひてー せーかつして いけるよーな
まー なんちゅーか のーりょく ちゅよな もの

A. なってますやろー。ふん。

B. しぜんに そなわつとんねや。 (A. ー。)

(B. ああ。) その うち 虫 あまり (B. うん。

そうかなあ。) 付きませんし、消毒を あまり しなくても
よろしいでしょ。そしてあれ ねえあなた よろしいわね。

(B. ああ。) 葱だったら 体に ねえ。それで もう 葱に
しようと思つて ねえ。もう 虫と 人間との 知恵比べ
でねえ。なに 虫に 負けていたら つまらないと思つて。

B. それはまた 虫は 虫で 人間の 知恵に 上回るような
考えを 持っているかわかりませんねえ。

A. 持っていますよお。偉い 偉いですよ。

B. なんにも それ 言つて 聞かして (A. ふん。) 教育 するの
でもないけど (A. ふん。) 自然に そいつらはまあ
そうして 生活していけるような まあ なんか 能力
というようなもの

A. なっていますでしょ。ふん。

B. 自然に 備わつてるのだね。 (A. ねえ。)

老年男子と若年男子との会話 大和郡山市 矢田町矢田

A. 明治44年生 B. 昭和22年生

B. なー おら がっこーの じぶんやったら ほんまー ろくねんかん
ずーっと おんなし かおぼかし みてたのに なー。

いまー よーちえんだけでも なんぼや。 よんひゃくなんにん
おんね なー。(A. うん。うん うん うん。せや。) せんぶで。
むかしやった しょーがっこだけでも

A. さんびゃくごじゅうーにん おりやろ

B. さんびゃくごじゅうーにん おる

A. ごじゅうーにんお ろつみ。 んで ごろ さんびゃくにん。
あつたり なかつたりや。

B. あつた なかつたーや。 あー。

A. あつた なかつたりや。 ほ いま せんごひゃく なんぼや
てのー。

B. せんせわ ずーっと はじめから おわりまで よー にた
せんせばかりやしなー。

A. はー。 ほんまや ほんまや。 あんまり がっこの せんせも

B. ねえ。 おれの 学校の ころだったら ほんと 六年間
ずっと 同じ 顔ばかり 見ていたのにねえ。 今は 幼稚園だけでも
何人だろ。 四百何人 いるんですね。(A. うん。うん うん うん。
そう。) 全部で。 昔だったら 小学校だけでも

A. 三百五十人 いるだろう。

B. 三百五十人 いる。

A. 五十人を六組。 で、 五六 三百人。
あつたり なかつたりだ。

B. あつたり なかつたりだ。 ああ。

A. あつたり なかつたりだ。 それ 今 千五百 いくらだつてね。

B. 先生は ずうっと 初めから 終わりまで よく 似た 先生ばかり
だし ねえ。

A. はあ。 ほんとだ ほんとだ。 あんまり 学校の 先生も 変わっ

かわってほらへん わの一。

B. まいまの こどもやった ほんで あれ ちゃう け、 おら
おらやったら しょーがっこの せんせー みてもー おやこみたいん
おもてるけど いまの こどもやったらー そーゆふな めーで
みよらへん。 みとらへん。 みとらんやろ なー。

A. それも あるやろ なー。

B. んー。 こんだけー くみが よーけ あって まいとし せんせ
ころころ かわって いったら せんせじたいに もー。

A. せんせ どれや わからへん。

B. したしみがー なくなっ てくる わの。

A. ほらー ちがう ちがう。 そらー たしかに ろら もー。

(B. んー。) そら やっぱい なー。 がっこでも もちあがり して
もうぐらいに なったら むらの せんせと したし なるし なー。

(B. せや せや せや せや。) こころやす ころ やっぱい せんせ
なつくけどもー。(B. んー。) んな ころころこー かわってたら
そら もー な。 どー しても なつかしー ちゅーか

B. おいらの じぶんわ いまわ このへんの こどもあ あんな なー。

ておられないよね。

B. まあ 今の 子供だったら それで、 なんじゃないですか、 ぼく、
ぼくだったら 小学校の 先生を 見ても 親子のように 思っている
けど 今の 子供だったら そういふうな目で 見やしない。 見て
いない。 見てないだろうねえ。

A. それも あるだろうね。

B. うん。 これだけ 組が たくさんあって 毎年 先生が ころころと
変わって いったら 先生自体に もう。

A. 先生が どれか 分かりやしない。

B. 親しみが なくなっ てくる よね。

A. そりゃ 違う 違う。 そりゃ 確かに そりゃもう。

(B. うん。) そりゃ やっぱい ねえ。 学校でも 持ち上がり して
もうぐらいに なったら 村の 先生と 親しく なるし ねえ。

(B. そう そう そう そう。) 心安く 子らも やはり 先生に
なつくけれども。(B. うん。) まあ ころころこころと 変わっ
たら そりゃもう ね。 どうしても 懐かしみ というか

B. ぼくらの 頃は 今 は このへんの 子供は あんな ね。

あのー まー おらも らんどせる もって いてたけど よこつりの
かばんて このごろ あらいん なー。

A. そや なー。よこつり あらひん なー。ほんと それ あらへん
なー。あの らんどせるお へつたらうかー (B.うん。)

さもなかったら あの さげるかや なー。

B. さげるかー。もー じょーきゅーい

A. よこつり あらへん。

B. じょーきゅーせー になったら なー。(A.ふん。) ごねんぐらい
なったら あの さげる かばん もってー あるいottaけどー
いま あの かばんわ この へんに うって ないのやる か。

A. うって ない なー。あの くのー かばん なー。

あのう まあ ぼくも ランドセル 持って 行つたけど 横吊りの
鞆なんか このごろ ない ねえ。

A. そうだね。横吊り鞆 ない ねえ。ほんとに それ ない ねえ。
あの ランドセルを 背負うか (B.うん。)

さもなかったら あの 手に下げ 持つかだね。

B. 下げ持つか。もう 上級へ。

A. 横吊り鞆は ない。

B. 上級生に になったらね。(A.うん。) 五年ぐらいに になったら
あの 下げ持つ鞆を 持って 歩いてたけど 今 あの 鞆は
この あたりに 売ってないんだらうか。

A. 売って ない ねえ。あの 黒の 鞆 ねえ。

発行日： 平成22年7月吉日

編集： 東京奈良県人会

発行： 東京奈良県人会
会長 西 与吏郎

編集委員： 中村 慶一
二村 吉光
藤本 和大



〒102-0093 東京都千代田区平河町2丁目6番3号 都道府県会館9階
奈良県東京事務所 内
TEL: 03-5210-2838
URL: <http://www6.plara.or.jp/tkynarakenjinkai/>